

“What's past is prologue”

MARCH No. 4 2007

歴史学研究センター発足4年目を迎えて

専修大学社会知性開発研究センター／歴史学研究センター事務長

田中 正敬

私どものプロジェクト「フランス革命と日本・アジアの近代化」では、これまで4年間にわたり研究を進めてまいりました。「フランス革命」というテーマは、専修大学図書館に所蔵されているフランス革命関連の4万数千点に及ぶ史料群「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」がもとになっているものです。このプロジェクトは文部科学省の「オープン・リサーチ・センター整備事業」として承認され、その費用の一部は市民の方々の税金によってまかなわれています。その成果は『社会知性開発研究センター／歴史学研究センター年報』とこの『会報』に収録されています。

こうした研究上の成果は、私どものプロジェクトに外部からお招きして参加していただいた多くの研究者の業績によって支えられています。お招きした第一線の研究者のお話から学ぶことは方法論的な問題から具体的な研究の内容まで様々です。

とりわけ今年度は、フランス革命後のヨーロッパ・アジアの諸地域の人々が具体的にどのようにフランス革命を捉えたのか、そしてそれはどのような歴史的条件に規定されているのかなどの諸問題が、研究者間の議論の中からあらためて浮き彫りにされたように思います。

昨年10月の公開講座は、「フランス革命とヨーロッパ」というテーマでフランス革命における革命

家の思想や革命がフランスで起こった背景についてインドと日本のお二人の研究者にお話しを伺いました。11月の国際シンポジウム「アジアの近代とフランス」では日本・中国・韓国・フランスの研究者をお招きして、近代の東アジアにおけるフランス革命のとらえ方、そして近現代の日本における革命のイメージの特徴について報告をして頂きました。

このプロジェクトを通じて、任期制助手として在籍する若手研究者やプロジェクトへの協力者のなかからこれまでに5本もの博士論文が業績として提出されたのも大きな成果です。こうした業績は、もちろん若手研究者の日々の研鑽から生まれたものと言えるでしょうが、それは同時に多様な研究者との交流、そして何よりもプロジェクトへの市民の方々の御理解と御協力に支えられていると考えております。この場を借りて、みなさまに御礼を申し上げます。

毎年、多くの方々が公開講座や国際シンポジウムに足を運んでくださいます。2007年度は私どものプロジェクトがいったんの区切りをつける年になりますが、御意見や御要望を受け止めつつ、本年も新たな企画を打ち出してまいります。今後とも、私どものプロジェクトに積極的に御参加をいただければ幸いです。